

2010年

売れすぎ つや姫足りない

取り扱い店 目標の2.4倍 1200店

県が急ぎよ、募集を停止

県産米新品种「つや姫」の人氣が順調に上昇し、取り扱う店舗や宿泊施設が、県の目標を大きく上回り、1200店を超えたことがわかった。うれしい悲鳴が上がる中、供給が限られているため県は募集を急ぎよストップ。農林水産省の新米検査では、つや姫が1等米比率で最終的に全国トップとなる可能性もあり、今後、知名度アップや生産地拡大に追い風が吹きそうだ。

県は、首都圏での消費拡大に向け、つや姫の流通業者を「取扱協力店」と認定。県内のスーパーや生協、米小売店など140社(約350店)のほか、24都道府県に広がり、特に都内では210店以上に達した。また、つや姫を使った料理を出す「提供店」も、県内67店、県外14店となり、都内では港区六本木の郷土料理店など10店に上る。

県新農業推進課によると、10月10日に県外販売が始まり、流通が本格化するにつれ、取り扱いの応募が急

1等米比率 最終的に全国1位も

増。当初目標の500店を大きく超え、「ここまで増えるとは予想外」という。ただ、需要の拡大に対し、流通量が1万2000ト前後と限られているため、県は11月中旬で募集を停止した。

農水省の新米検査(うるち玄米、10月末現在)では、1000トン以上検査済みの銘柄の中で、県産つや姫の1等米比率98%は全国1位。長野県産「ひとめぼれ」(96・8%)や北海道産「ゆめぴりか」(96・5%)と接戦となっている。既に全量の8割近くが検査済みのため、同課は、「来年3月末頃にほぼ固まる最終結果も期待できる」としている。

1等米比率と流通価格は必ずしも一致しないが、JA全農山形の斎藤松明米穀部次長は、「これだけの猛暑の年に100%近い1等米比率は正直驚く結果。今後の流通価格の上昇や生産地の広がりが期待できる」と話している。